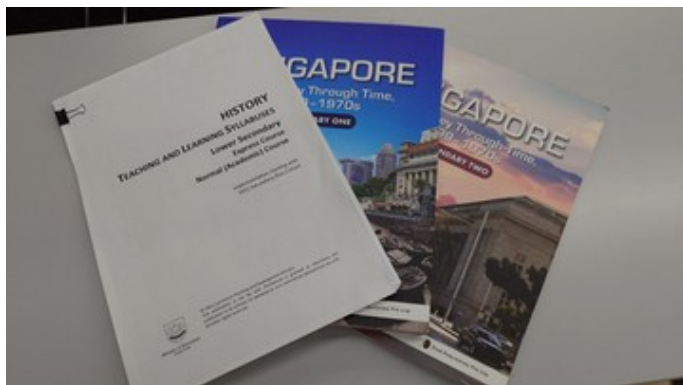


知 識 探 訪

多民族社会の横顔を読む
協力：日本マレーシア学会 (JAMS)

シンガポールの中等歴史教科書の中の日本占領期

松岡昌和 (大月市立大月短期大学准教授)



シンガポール教育省によるシラバスと歴史教科書 (筆者撮影)

歴史教科書は、それで学ぶ「国民」たちの標準的な歴史的知識を形成するものであり、それ故に高度に政治的なテキストであると言える。

筆者は近年、第 2 次世界大戦と日本占領期の記憶が、学校教育の中でどのように語られているのかに関心を持ち、シンガポールの歴史教科書を読み解いている。対象としているのは、主に自国史を扱った中等教育 1 ～ 2 年次の教科書であり、そこで日本占領期がどのように描かれているのかを検討している。

1980 年代に歴史が必修科目となって以降、シンガポールの歴史教育の中での日本占領期の位置付けは強化されてきたと言える。

そもそも民族ごとに経験が異なる日本占領期は、シンガポールにおいてセンシティブなトピックであった。国民統合を進めていく政府は、分断されがちな戦争の記憶を「共通の苦難」として統合し、そこに政府の現在の課題を盛り込んでいった。ここに民族ごとに記憶が分断されているマレーシアとの違いを見て取ることができる。

その過程で政府は「国民教育」の方針を打ち出し、そこで示された「民族の調和」や国防意識のかん養といったアジェンダが歴史教育に盛り込まれていった。

2021 年度より、シンガポールの中学校では、新たなシラバスに基づく歴史教育が行われるようになった。このシラバスでは、歴史学習者としての資質が示され、それまでの知識重視から思考力を重視するようになり、生徒自身が探究学習を行うための素材が多く教科書に盛り込まれるようになった。

日本においても近年学習指導要領が改訂され、探究学習に重きを置くようになったが、こうした動きが両

国で同時期に起こっていることは注目に値する。シンガポールの歴史教科書では、新聞記事やインタビュー、写真、イラストなど多くの資料が掲載されており、まさに探究学習向けの教材となっている。

その中で第 2 次世界大戦や日本占領期はどのように描かれているのであろうか。日本軍によるマレー半島侵攻の章では、記述の中心はイギリス軍の戦略の「失敗」と日本軍の猛攻である。そこに現地の英雄の活躍が盛り込まれる。最後に生徒は降伏したイギリス軍の司令官パーシヴァルの評価について事例研究を行うことになっており、そこから国防について考えるようにデザインされている。

日本占領期については、日本軍政が暴力とプロパガンダの両面で各民族に対する圧政を行った様子が記述されている。まとめとして、生徒が資料を基に日本軍政下を生きた人の日記を書くというアクティビティーが用意されている。豊富な資料による探究学習が求められながらも、あくまでシンガポール政府のアジェンダに沿った歴史像を逸脱しないように工夫が施されている。

シンガポールの歴史教育のシラバスや教科書を読んで興味深いのは、そこに「共感」をかん養するということが盛り込まれている点である。

歴史教育というと、しばしば(悪い意味で)教科書の記載事項を「事実」としてひたすら暗記する、というイメージを持つ方も少なくないであろう。教科書の記載事項は事実の羅列であり、そこに「共感」が入り込む余地は少ないように感じる。

そうした中で、シンガポールのシラバスは注目に値する。これがどのような意味を持つのか、筆者は現在感情史の観点から検討を進めている。

< 筆者紹介 >

1979 年生まれ。一橋大学大学院言語社会研究科博士後期課程単位修得退学。博士(学術)。研究テーマは日本占領下シンガポールにおけるメディア文化政策および戦争の記憶。戦前～戦時期のマラヤを題材としたヴァネッサ・チャンの小説『わたしたちが起こした嵐』(春秋社、2024 年)では解説を執筆。